



吉良森子 | VEEN [2003年]

Moriko Kira | VEEN

中村好文 — イラスト、写真も
Yoshifumi Nakamura

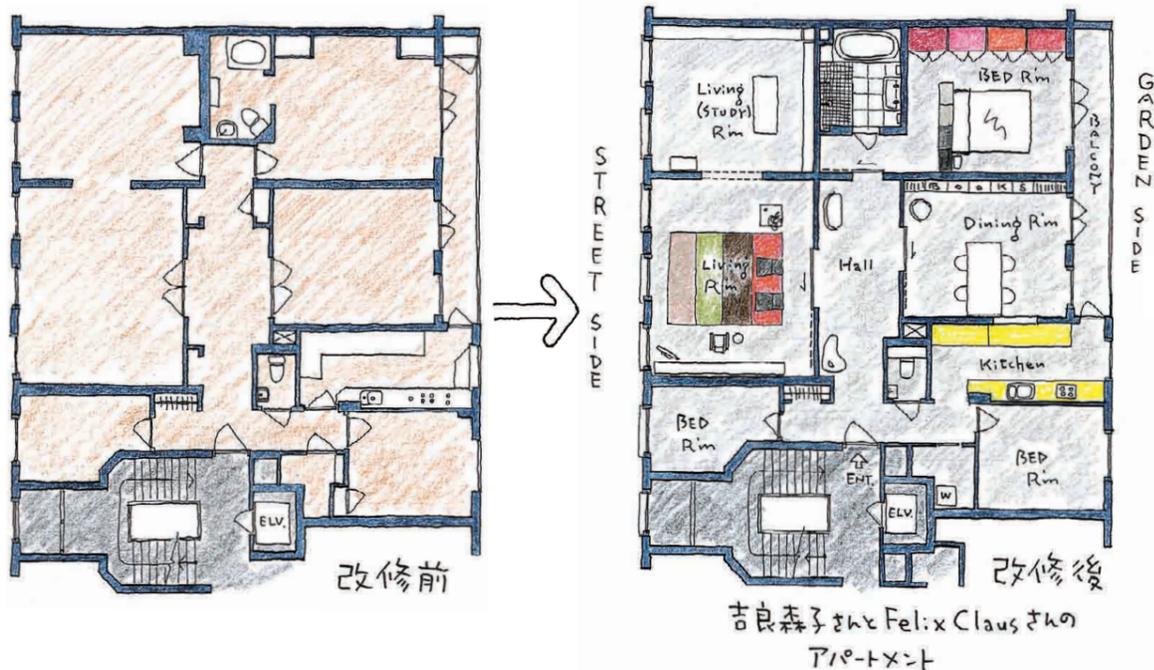


半日間の運河クルーズの後、陸に上がって徒歩でアムステルダムの建築巡りをしたので、ちょっと疲れ気味の二人。しかし、こういう時に飲むシャンパンは格別に美味しいんです!

目の前には空と大地の境目に向かってハイウェイがどこまでも続いていた。私たちの乗った白のボルシェは1930年代に埋め立てられたポルダー（干拓地）を突っ切り、アムステルダムからオランダ北部の古都、フローニンゲンを目指して快調に飛ばしていました。「私たち」と書きましたが、運転手はオランダで活躍している建築家の吉良森子さん。助手席でオランダのポルダーの茫洋とした広がりや空の大きさ、雲の表情にひたすら感じ入っていたのは私です。オランダの景色を眺めながら17年前からオランダに住んでいるという吉良さんから、この国の建築事情や、風俗習慣や、国民性や気質について話を聞いていると、そのひとつひとつに妙な説得力があり、こ

ちらはいちいち分かったような気持ちになります。たとえば吉良さんは「オランダ人は、そこそこで充分ってところがある」といいます。「なにごとによらず中庸というか、頑張らないわけじゃないけど、頑張りすぎないところがあると思うの。ナチスドイツが入ってきたときも、ほとんど抵抗しないでさっさと降伏しちゃって、一億玉碎なんて悲壮なことを絶対に言わないわけね。ねばならぬ、というような暑苦しい大義名分を振り回さない処世術が、この国の長所であり、欠点だと思う…」と言うのです。そう聞くと悪名高き「公娼制度」も「ソフトドラッグの公認」も、なんとなくうなずけるような気がしてくるのでした。

話が最初から脇道にそれてしまいましたが、今回はアムステルダム在住の建築家、吉良森子さんの自邸の見学記です。吉良さんはオランダでは有名な建築家ですが、日本の建築界ではあんがい知られていないのではないかと思います。そういう私も、吉良森子という建築家の存在を知ったのが今年の暮れのこと、初めてお目にかかったのは今年の2月のことです。先ほどもちょっと触れましたが、吉良さんは日本を離れオランダに拠点を移してから17年、アムステルダム市内に建築事務所「moriko kira architect」を構えてから13年経つそうです。もともと早稲田大学時代にデルフト工科大学に留学したことがきっかけになったことは容易に推察できますが、それ以上にオランダという国と色々な意味で馬が合ったに違い



[建築概要] 名称:VEEN | 所在地:アムステルダム | 家族構成:2人 | 延床面積:135㎡ | 規模:地上3階 | 設計:吉良森子/moriko kira architect

ありません。30歳で独立した後に取り組んだロッテルダムの「オランダ建築博物館」や、ブリュッセルの日本レストラン「田川」の仕事ぶりが高く評価され、1998年から3年間、オランダの「住宅国土開発環境省」に国家公務員として勤めたというちょっと変わった経歴の持ち主でもあります。吉良さんは個人住宅の設計はもちろん、集合住宅、店舗、パビリオン、各種建物の改修設計、都市計画までと、ありとあらゆるタイプの建築に幅広く取り組んでいます。急激に変化し続ける都市環境に対応しうる生活空間のデザインがテーマと開けば、ビルディングタイプにこだわらない仕事の範囲の広さがうなずけます。1998年にはオランダ政府建築局の建築家に任命され、「首相官邸の増改築」や「シーボルト博物館」など、オランダ政府建築局の依頼で国家的なプロジェクトもやり遂げています…と、吉良さんの輝かしい経歴の紹介はここまで。

さて、アムステルダム市内にある吉良さんの住まいを訪ねたのは、オランダ到着の翌日でした。アムステルダムを知るには運河巡りをしながらが一番というわけで、吉良さんが運河巡りのボートを手配して

おいてくれたので、午前中は吉良さんや吉良さんの事務所のスタッフと一緒にボートでアムステルダムの建築巡りをし、午後遅くなって吉良さんとパートナーのフェリックス・クラウス氏の住むアパートメントに到着しました。ついにご紹介しますが、フェリックス氏はオランダを中心に活躍している建築家で、大勢の所員を抱え、集合住宅などの大きなプロジェクトを手がけています。お二人の住んでいるアパートメントは大恐慌の直後(1930年初頭)に建てられた古い建物です。いわゆるモダン建築でも、特に目を引く外観でもなく、街並の中にひっそりと溶け込んでいました。このアパートメントの3階に吉良さんとフェリックス氏の住まいがあります。古い建物のリノベーションは吉良さんの腕の見せどころの仕事です。じつは先ほど触れた「首相官邸の増改築」も「シーボルト博物館」もそうしたリノベーションの仕事でした。こうした仕事に取り組むとき、吉良さんが最初にすることは、「建物の歴史を読み解くこと」だといいます。いつごろ、どんな社会情勢の中で建てられた建物か?、構造や、工法や、仕上げや、性能はどのように考えられていたのか?などを事細かに調べ上げ、頭に入れた上で設計作業に取りかかるのだそうです。さいわいオランダにはそうした古い資料を大切に保存して



デ・スティル派の平面構成を連想させる食堂の壁面。サービス用に開けられた横長の小窓から台所の鮮やかな黄色が覗く。ワインの壺(びん)がちょうど通るように小窓の高さを決めたそうです



玄関ホールから寝室方向を見る。左の開口部は居間、右の開口部は食堂に繋がる。開口部がプロセニウム的に開けられている



寝室方向から玄関ホール方向を見る。それぞれのプロセニウムの脇には、番犬のように種類の違う椅子が控えている

おく伝統(慣習?)があり、1904年以降の建物の確認申請図面はすべて保存されている上、誰にでも閲覧できるよう公開されているので、こうした事前の調査は非常に効率よくできるのだといいます。このアパートメントのリノベーションでは、既存のドア枠や中木などを残すべきかどうか悩んだそうですが、いかんせん70年以上前にローコストで建てられた建物で、壁は煉瓦造ですが、床が木造だったため、遮音の性能を上げるためにすっかり変えることになったのです。改修前と改修後の図面を見比べてもらえばお分かりいただけますが、この改修では基本的な壁の位置は変わっていません。というより、間仕切り壁が構造壁(耐力壁)になっているため、取り扱うことができなかつたのではないかと思います。そのかわりと言ってはなんですが、床面は既存の木の梁の上に遮音ボードとスチールのデッキプレートを敷き込み、コンクリートを打った上でリノリュームシートで仕上げるといふ、念の入ったことをしています。これは想像以上に大がかりな工事の上、建物の構造に関わることなのでちゃんと構造計算もし、確認申請をした上で施工したとのこと(オランダ政府建築局の建築家という立場上、この種の工事の模範例にしようという意気込みもあったのではないかと拝察します)。さらに、上階の音を遮断するために既存部分の天井も取り除き、上階の床を支えている木製梁の下端に遮音ボードを二重に張り上げたうえで、新たに天井を張って仕上げています。さて、そうした制約の数々を抱えた上でできることは何か? 吉良さんは考えました。そして、このリノベーションでは、ヨーロッパの建物のような部屋の集合体によって建築を作り出すのではなく、部屋と部屋とがゆるやかに連続していく「繋がり」がテーマになりました。ひとつの部屋から次の部屋が見えるようにしておくこと。その見え方も舞台のプロセニウムのようにお互いの部屋同士が額縁で切り取られた舞台のように見える趣向です。伝統的な日本の住宅にある座敷と座敷を仕切る襖も、真ん中の二枚の襖を引き分けると左右に残った襖が一種のプロセニウムの効果をもたらしますが、吉良さんもそうした日本建築特有の空間の繋がり方がヒントになったと話していま

した。開口部をちょうど壁の真ん中に来るように開けていること、その開口部を開き戸にせず引き戸にしていることなどは、吉良さんの狙いをはっきり物語っています。ところで、部屋に通されて真っ先に感じたのは、このリノベーションのもうひとつの大きなテーマが「色」だったのではないかということです。床を淡いグレーにし、壁と天井を基本的には白くした上で、要所所に驚くほど鮮やかな色が使われていて、それが視覚的に変化を与え、空間を引き締めるのに非常によく効いています。居間の床には4色のカーペットが敷き並べられていますし、台所の家具はハッと息を呑むような黄色です。寝室にある造り付けのクロゼットの扉には、オレンジ、赤、ピンクが配されていました。そしてその鮮やかな色の使い方が、ルイス・バラガンの色彩のように壁面的にはなく、色片を貼り付けたように使われていることに特徴があります。たとえば、食堂の台所側の壁にはサービスのための横長の小窓が開けられていますが、そこから垣間見える台所は黄色というより金色の色片のように見え、その右脇に飾られている赤い色相の絵とあいまって、デ・スティルの絵画を思わせる平面構成になっています。私にとってオランダは、デ・スティルの、モンドリアンの、そして、リートフェルトの国なのですが、その鮮やかな色遣いは吉良さんがそうしたオランダの色の伝統を意識したのか、それともオランダの空気にある鮮やかな色彩を引き出す摩訶不思議な力に誘われてそうなったのか、そのあたりが私にははっきり分かりませんでした。論理的かつ感覚的にものごとを考える吉良さんのことですから、このことについて質問すれば、きっと納得のいく説明が聞けたかも知れませんが、うっかり聞き逃してしまいました。さて、絵画的であると同時に、吉良さんとフェリックス氏の住まいには、所帯じみた匂いがしない、生活感が希薄、というのも大きな特徴だと思いました。そこに大人二人が暮らしていると思えないほど、室内は綺麗サッパリしているのです。ただ食堂の壁一面に造り付けられた本棚にぎっしり詰まった本たちが、ここに住む住人の人柄と体温を感じさせてくれました。本好きの私は本棚にぎっしり詰まった本



食堂は大きな樹木の茂る緑豊かな庭に面していて気持ちがいい。ベランダ伝いに台所に行くことができる。壁から突き出された食卓用の照明器具は、ル・コルビュジェの「母の家」のピアノ用の異形の照明を思い出させます



鼻歌まじり、手慣れた手つきで料理に精を出すフェリックス・クラウス氏。この「黄色」、臆病者の私にはとても使えない色ですね



壁面を埋め尽くす、本、本、本、本。ひとつひとつの背文字を読むだけでも時間を忘れます



寝室。壁に造り付けられたクロゼットの扉の色、間仕切り欄の色に注目していただきたい。オランダは潜在的な色彩感覚を呼び覚ます風土なんではないか?

の背文字を眺めているだけで、喉元を撫でられている猫のように陶然とします。本の多くはフェリックス氏のものだと聞くと、氏が私以上の愛書家であることが分かりますが、以前は居間の隣りにある書斎のふたつの壁も本でぎっしり埋まっていたと聞くと、それだけで機嫌のいい猫のように喉が鳴るのです。そうそう、私とフェリックス氏には本

好きというだけでなく意外な共通点がありました。ズバリ、料理好きなことです。ふと、台所を覗きこむとフェリックス氏はスピーカーから流れる音楽に合わせ、鼻歌まじりで愉しそうに夕食の準備をしていました。キッチンがただ美しいオブジェではなく、ちゃんと使えるところも私の気持ちを大いにくすぐりました。

なかむらよしふみ——建築家/1948年生まれ。
武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。
主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]など。